

地域包括ケアネットワーク No.47

真庭市の10年の活動

真庭市医師会 作本 修一

真庭市医師会が認知症を切り口とした地域ケア体制の構築を他職種、ボランティアに呼び掛けてから10年が経過しました。この間、市が養成した認知症キャラバンメイトは368名で、認知症サポーターの養成(現在10,094名)や、高齢者の見守り、傾聴活動、家族会、カフェの立ち上げ、認知症セミナーの開催、スキルアップ研修会などを単に認知症への対応だけでなく、地域コーディネーターとしての役割を担って活動をおこなっています。

また、岡大脳神経内科にアドバイスをいただきながら、認知症予防活動を「げんき☆輝きエクササイズ」と名付け、体操、笑いヨガを基本に鬱状態、言葉の流暢性、握力等のチェックを行いながら進めています。現在、15団体の244人が参加されています。そして2年前から「真庭いきいきテレビ」でも毎日10時、14時、20時に30分番組でこのエクササイズを放送し、各家庭に届けています。

さらに医療と介護の連携も「真庭共通シート」(昨年から医師会を中心にIT化を検討している)を用いて進んでおり、平成22年からの介護職の医療知識向上のための「医療講話・寺子屋」も32回を数えています。

そして14職種が参加している「医師・多職種懇談会」も様々な活動を行っています。特に6年前から取り組んでいる「口腔ケア」の活動は、在宅等で口の中のケアを実践することで、誤嚥性肺炎による入院や死亡数の減少という成果が出ています。さらに昨年からはリハ職、栄養士の指導のもと、「食べていただく工夫」に取り組み、活動内容のさらなる充実を図ることとしました。その後「手引書」を作成し、在宅、施設などで活用することとしました。

さらに薬剤師会の協力で、3年前から医療、介護が連携し在宅での残薬、認知症高齢者の服薬、ポリファーマシーの課題にも取り組んでいます。そして「お薬手帳」の一本化や、介護職も利用者の薬を理解すること等を申し合わせました。

昨年12月にアンケート調査を行ったところ、その成果は少しずつ進んでいるようです。

また昨年からは医療、介護、福祉の職場の人員不足の課題にも取り組んでいます。この職種に対して様々なマイナスイメージばかりが強調されています。そのため募集しても応募がないという現実があるわけです。しかしそのような条件でも職員は喜びや誇りを感じてこの仕事に従事しているのです。私たちは、笑顔があふれる職場の雰囲気少しでも伝えようと考えて、2カ月前に振興局単位で写真展を開催しました。この活動は社会福祉協議会や、商工会青年部にも協力していただきました。その結果、市民の方からも勇気をもらえる内容の言葉をかけていただいています。

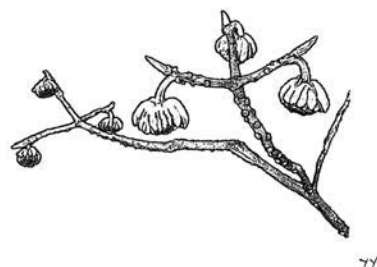
また、昨年6月の地域ケア会議では、民生委員、歯科医師、ケアマネ等から移送に

対する課題の提案があり会議として取り組むことを決めました。そこでアンケート調査を行ったところ、銀行、役場の手続きに本人確認が必要とか、コミュニティバスの停留所までが遠い、車いすでは乗車できない、免許証がなくなると生活に困る等様々な問題があることが分かりました。その全てを解決することは無理なのですが、何かできないかと考えました。そして、社会福祉協議会にストレッチャー付きの車両が一台あるのですが、人員その他の理由により年1回程度しか利用されていないことが分かりました。そこで、この車両を有効利用することになり、行政の募集で9名のボランティアの運転手が誕生しました。そして様々な職種が協力することで何とか稼働できるようになりました。将来的には、車いすでの買い物援助等も視野に入れたNPOを立ち上げることを考え、準備を進めているところです。

また、9年前から活動している「認知症地域支援推進会議」も「真庭市地域ケア会議」と名称を変えて包括的地域ケア体制の構築へと進んでいます。そして3年前から取り組んでいる各振興局単位の「生活圏域ケア会議」もかなり形になってきていて、各々特徴ある活動を開始し、小学校単位の組織も形成されつつあります。

さらに昨年、医師会では各生活圏域ケア会議のメンバーを中心に「在宅療養推進会議」を立ち上げ、人的資源の乏しいこの地域での在宅診療を担うチームの形成を進めようと他職種、ボランティアに呼び掛けることを始めました。

我々真庭の活動は初めから組織があったのではなく、徐々に同じ考えの仲間が集まってきてメンバーが増えてきたものです。そこで地域における課題を話し合い、出来ることは何かを相談しながら進めてきました。いわば「草の根運動」として広がってきたというのが特徴ではないかと考えています。



御津医師会：山中慶人